

(別刷)

芸術を主体とした学外活動で育つ力

— アートパークの実践 —

大成 哲雄 北沢 昌代 桂 瑠以
西園 政史 永井 妙子

生涯学習研究

— 聖徳大学生涯学習研究所紀要 —

第16号 別冊

2018年3月

芸術を主体とした学外活動で育つ力

— アートパークの実践 —

大成 哲雄・北沢 昌代・桂 瑠以・西園 政史・永井 妙子

要旨

本研究は、学生がアートパーク等芸術を主体とした学外活動を通して育つ力についてアンケート調査を行い、その分析結果より、どのような力が育成されているのかを明らかにし、考察することを目的としている。平成28年9月からは川村学園女子大学桂瑠以准教授の協力を得て、アンケート内容の再検討を行い、調査を実施し、分析を行った。ここでは、平成28年4月から29年9月現在までの研究過程を中間報告として示す。

尚、本研究は「芸術を主体とした地域と学生による多主体間協働」（平成28、29年度地（知）の拠点整備事業 地域志向教育研究 北沢昌代（研究代表 保育科）永井妙子（保育科）大成哲雄（児童学科）西園政史（児童学科））研究の一環として行っている。

1. はじめに

「アートパーク」は、聖徳大学と地域、行政が協力し、聖徳大学に隣接する松戸中央公園で2008年から行っているアートプロジェクトである。その内容は学生や地域団体が親子対象の造形ワークショップを企画、実践し、学生の社会参画力育成や地域活性化を目的としている。「アートパーク」は毎年、7月の第一日曜日に開催し、今迄に10回実施した。参加者は第1回目の80名から、回を重ねる毎に増え、2016年の「アートパーク9」では1870名であった。毎年、1000人を超える親子が松戸市内外から集まり、地域に根付いた活動になってきている。

参加学生の多くは、聖徳大学児童学部児童学科と聖徳大学短期大学部保育科の学生で、保育士、幼稚園教諭を目指しており、他に小学校教諭志望の学生が数名いる。この活動を通して学生は子どもと関わる仕事に必要な様々な事柄を学んでいることが明らかになっている^{1) 2) 3)}。個々の成長、学びの内容については、事後のレポート、アンケート等をもとに主体性、意欲、コミュニケーション能力、造形表現力などが伸びている実感がある。

しかし、近年、学習を通してどのような力がついたのか、エビデンスを求められる機会が多くなって来た。アート活動を通してどのような力がついたのか、より見える形としてのエビデンスを示す必要性がでてきていると感じる。そこで、北沢と大成、西園、永井が平成28年5月に行った

「学外活動で育つ力」（研究1）の調査結果を踏まえ、平成28年9月からは川村学園女子大学桂瑠以准教授の協力を得て「学外活動と学士力の育成との関連」（研究2）を作成し、学外活動の事前・事後に実施した。本研究では、平成29年7月に実施した「アートパーク10」の活動を中心に中間報告として現段階の分析結果と考察を行う。

2. 研究過程

研究過程は以下の通りである。

（1）研究1—学外活動で育つ力—（H28年4月～8月）

- ①内容の検討、アンケートの作成。
- ②アンケートの実施。「アートパーク9～にちようびの野望～」(H28年5月～7月 北沢グループ、大成ゼミ 26名)
- ③集計、分析、考察（8月）

（2）研究2—学外活動と学士力の育成との関連—（H28年9月～）

- ①桂瑠以准教授（川村学園女子大学）に協力を依頼。
 - ②学士力の観点から調査項目の再検討、アンケートの作成。
- *分析結果として統計的に有効な方法を取り調査するため、1項目につき5つの具体的な質問を作成。

- ③予備調査の実施。子どものアート研究会「おえかきワークショップ 空想松戸屏風絵物語」(H28年11月 きぼうのつばさ保育園), 大成ゼミ「しろくま図工室」(H28年11月 松戸市文化ホール), 子どものアート研究会S「スライム遊び」(H29年1月 きぼうのたから保育園), 子どものアート研究会S「マラカスで遊ぼう」(H29年1月 きぼうのつばさ保育園)
- *予備調査は短期間の準備で実施するワークショップであったため, 事前・事後の間隔が短く, 参加学生の人数も少なく, 分析に十分な結果は得られていない。
- ④事前アンケートの実施。「アートパーク10～ラブ&ピース大作戦～」(H29年5月 大成ゼミ, 西園ゼミ, 永井グループ, 北沢グループ, 児童文化有志 73名)
- ⑤事後にインタビューの実施も決定。
- ⑥事後アンケート及び, インタビュー(各グループ2名ずつ)を実施(H29年7月)。
- ⑦集計, 分析, 結果の検討(8月～)

3. 研究1—学外活動で育つ力—

(1) 問題

本研究では, 「アートパーク9～にちようびの野望～」(H28年7月)に参加する学生が, 自分たちの成長をどのように捉えているかを明らかにすることを目的とした。アンケートの内容は, OECD 東北スクール⁴⁾で行った生徒への調査を参考に教員の経験から設問を作成し, 実施した。

(2) 方法

①調査時期と調査対象者

H28年5月～7月にアンケートを実施した。調査対象者は, アートパークに参加した大成ゼミ, 北沢グループの大学生26名であった。

②調査手続き

アートパークの準備の開始時(事前調査)及び終了後(事後調査)にアンケートを配布し, 調査した。調査実施にあたり, 本調査の目的について説明を行い, 同意した場合のみ回答し, 回答しなくても不利益はないことを教示した。データは統計的に集計されるため個人情報保護は保護されること等の説明も行った。

③アンケートの構成

アンケート内容は8項目の質問(5件法)と自由記述(事後)とし, 質問項目は自分の活動を振り返りながら答えやすい質問数と内容で作成し, 準備がスタートする事前とアートパーク終了直後の事後に実施した。ここでは, 事前・事

後に実施したアンケート質問項目の結果と考察について報告する。

研究1「学外活動で育つ力」アンケート

聖徳大学・聖徳大学短期大学部 美術研究室				
美術研究室では, 皆さんの保育の実践力向上を目的に, 教員と一緒にアートパークの参加やワークショップなど, 様々な活動を行っています。そこで, この様な活動を通して, 皆さん自身がどのような力をつけることができたと感じたのかを調査して, 今後の活動の参考にしたいと考えています。また, 貴女自身が活動を振り返ることにより, 自分の成長を確認することになります。活動を始める前と後では皆さん自身が, どのような力が育ったと感じたのかを記入してみてください。				
【活動を通して育てたい力 ねらい】				
1. 好奇心: いろいろなものに興味を持って取り組もうとしている力				
2. 発想力: 自分で考えて新しいことを考え出す力				
3. 造形力: 形や色で, イメージを伝えたり, 表したりする力				
4. コミュニケーション力: みんなで協力して仕事をする力				
5. 問題解決力: いろいろな場面で予期しない出来事に対して適切に対応して解決できる力				
6. 発信力: 思ったこと, 考えたことをまとめ, 他者に伝える力				
7. 保育者(指導者)としての感性: 子どもの思いに気付き, どのように援助したらよいかを考えて行う力, 保護者や子どもの話を聞き共感したりする力				
8. 地域力: 地域の人たちや, 地域の特色を理解して, 自分もその中の一員として働ける力, グローバルな視点で地域を考えたりする力				
の活動に関して				
科		クラス	番号	氏名
《ゼミ(先生)》				
	自分の力	活動前(記入日 /)	活動後(記入日 /)	
1	好奇心	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
2	発想力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
3	造形力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
4	コミュニケーション力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
5	問題解決力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
6	発信力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
7	保育者(指導者)としての感性	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
8	地域力	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
9	達成感, 満足度		5 4 3 2 1	
【自分の力を分析する段階の説明】				
5 良くできている				
4 できている				
3 ふつう				
2 あまりできていない				
1 できていない				

(3) 結果

各項目の事前・事後の得点及び, 事前と事後の得点の差を表1に示した。その結果, どの項目においても, 事前より事後の方が高い得点が示された。

表1 学外活動で育つ力

	1 好奇心	2 発想力	3 造形力	4 コミュニケーション力	5 問題解決力	6 発信力	7 保育者としての感性	8 地域力	9 達成感, 満足度
活動前	4.08	3.15	3.12	3.5	3.04	3.0	3.58	3.62	
活動後	4.85	4.5	4.62	4.19	3.96	3.81	4.12	4.08	4.5
差	0.77	1.35	1.5	0.69	0.92	0.81	0.54	0.46	

注: 得点の範囲は1～5点である。小数点第2位以下四捨五入。

(4) 考察

アンケート結果に基づき, 主に事前と事後の得点の差について考察する。

事前と事後の得点を比較すると, どの質問も事後のほう

が、数値が高かった。中でも、造形力は1.5上昇し、最も変化が大きかった。次いで、発想力で1.35、問題解決力で0.92の変化がみられた。この理由として、アートパークの準備、当日を通じて、学生自身が作品を制作したり、造形表現に多く触れたりする機会があり、その経験によって造形力や発想力の成長を実感できたためと考えられる。また問題解決力は、アートパーク当日、直接子どもたちと関わり、実感したためと考えられる。一方、上昇率が低かったのは、保育者としての感性0.54、地域力0.46であった。この理由として、学生自身、アートパークは学生としての活動であり、それが「保育者」の仕事の力として直接結びつけて捉えていなかったためではないかと考えられる。また、「保育者としての感性」という表現が抽象的であり、学生が理解しにくかった可能性も考えられる。一番低かった地域力に関しては、地域の人たちにアートパークにやってくる親子も含まれることや、準備段階から協働している行政や松戸の市民団体の方々を地域の人たちと捉えづらかったという質問内容の問題点と、多くの学生が協働する地域団体の方々とは当日出会い、一緒に働いたり会話したりすることが少なかったこと等があるのではないかと考えられる。そのため、アートパークの活動は、地域と共に作り上げる活動であることを、学生によく理解されるように工夫する必要があるだろう。

このような考察を踏まえ、本研究では、設問の方法や内容にも課題があると考えられ、心理学を専門とする研究者に協力を得る必要性を感じた。川村学園女子大学桂瑠以准教授は、社会心理学を専門とし、学外活動のような実践的な調査の分析について高い見識があるため、協力を依頼することとした。

4. 研究2—学外活動と学士力の育成との関連—

(1) 問題

近年、大学教育では、「学士」の学位によって保証されるべき一定の能力を「学士力」として、学士力の育成が目指されている。中央教育審議会答申(2008)⁵⁾によれば、学士力は、「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」の4分野から成る。「知識・理解」とは、多文化・異文化に関する知識の理解や人類の文化・社会と自然に関する知識の理解などの特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解することであり、「汎用的技能」とは、コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力などの知的活動だけでなく、職業生活や社会生活でも必要

な技能であり、「態度・志向性」とは、自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力などであり、「統合的な学習経験と創造的思考力」とは、これまでに獲得した力を統合的に活用し、自らが立てた新たな課題を解決する能力のことである。これらは、大学の授業内での学習により、知識や技能を習得するだけでなく、社会で必要とされる人間関係を調整する能力や、社会と関わる態度、価値観等をも含むものである。そのため、学士力の育成にあたり、学外活動における主体的な学びは意義があると考えられるが、学士力を測定するための指標を用いて、芸術を主体とした学外活動での学びを実証的に検討した研究は少ない。そこで本研究では、研究1で実施した教員の経験より導き出した設問の内容を再検討し、学士力をもとに指標を作成し、アートパークの活動により、学士力のどのような側面が向上するかについて検討することを目的とすることとした。今回は、その中間報告である。

(2) 方法

①調査時期と調査対象者

H29年5月～7月にアンケート調査を実施した。調査対象者は、アートパークに参加した聖徳大学の大学生73名(平均年齢19.03歳)であった。

②調査手続き

アートパークの準備の開始時(事前調査)及び終了後(事後調査)にアンケートを配布し、アンケート調査を実施した。調査実施にあたり、書面において本調査の目的および倫理的配慮について説明を行い、同意した場合のみ回答し、回答しなくても不利益はないことを教示した。倫理的配慮に関しては、データは統計的に集計されるため個人情報保護されること、調査後のデータは厳重に管理し、分析後、適切に処分すること等の説明を行った。

③アンケートの構成

a. 事前・当日の活動に関する項目(事後のみ)

事前準備の活動時間:事前準備の時間について、「1. 全くしていない」「2. 1秒～30分未満」「3. 30分～1時間未満」「4. 1時間～2時間未満」「5. 2時間～3時間未満」「6. 3時間～5時間未満」「7. 5時間～10時間未満」「8. 10時間～20時間未満」「9. 20時間以上、長期的に継続して行った」の9肢択一で回答を求めた。

当日の活動時間:当日の活動時間について、「1. 全くしていない」「2. 1秒～30分未満」「3. 30分～1時間未満」「4. 1時間～2時間未満」「5. 2時間～3時間未満」「6. 3時間～5時間未満」「7. 5時間～10時間未満」「8. 10

時間以上」の8肢択一で回答を求めた。

当日の活動内容:当日の活動内容について、「子どもとよく関わった」「保護者とよく関わった」「ファシリテーター(進行役, 仲介役)として活動できた」「子どもや保護者が活動しやすいように, 材料を準備するなどの環境を整えた」の4項目を作成し, それぞれ「1. 全く当てはまらない」「2. あまり当てはまらない」「3. 少し当てはまる」「4. とても当てはまる」の4件法で回答を求めた。

b. 学士力に関する項目 (事前・事後同一)

学士力の中で, とりわけ芸術活動を通して育成される力に焦点を当てて質問項目を作成した。項目の作成にあたり, 中央教育審議会答申(2008)⁵⁾を参考にして, 美術教育及び心理学を専門とする教員5名で協議を行い, 「1. チームワーク, リーダーシップ」「2. 市民としての社会的責任」「3. コミュニケーション・スキル」「4. 問題解決力」「5. 知識・理解」「6. 統合的な学習経験と創造的思考力」各5項目を作成した。これら30項目について, それぞれ「1. まったく当てはまらない」から「4. とても当てはまる」の4件法で回答を求めた。(表3)

c. デモグラフィック項目

性別, 年齢, 学年などについて回答を求めた。

(3) 結果

①事前・当日の活動時間, 活動内容

まず, 事前準備及び当日の活動時間, 活動内容の平均値, 標準偏差を算出した(表2)。また, 図1, 2に, 事前準備及び当日の活動時間, 図3に当日の活動内容の度数分布を示した。

表2 事前・当日の活動時間, 活動内容の平均値・標準偏差

	事前準備の時間	当日の活動時間	子どもと保護者との関わり	ファシリテーターとしての活動	材料準備などの環境整備
平均値	7.07	7.08	3.79	3.18	3.29
標準偏差	1.48	0.72	0.53	0.63	0.88

注 $n=73$

注: 事前準備の時間は1から9の範囲, 当日の活動時間は1から8の範囲, その他は1から4の範囲である。

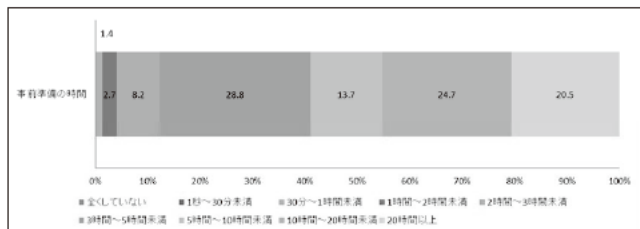


図1 事前準備の時間

事前準備の時間は, 「3~5時間未満」が28.8%と最も多く, 次いで「10~20時間(24.7%)」「20時間以上(20.5%)」

の順に多かった(図1)。また当日の活動時間は, 「5~10時間」が68.5%と最も多く, 次いで「10時間以上(21.9%)」が多かった(図2)。

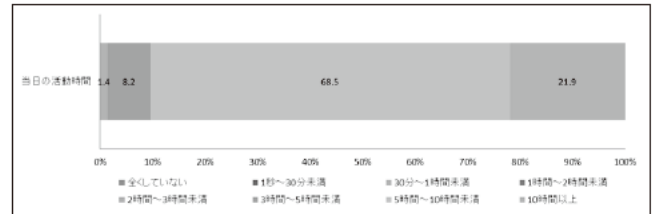


図2 当日の活動時間

当日の活動内容(図3)を見ると, 「子どもとよく関わった」は, 「とてもあてはまる」と回答した対象者が83.6%であり, 「少しあてはまる」と合わせると9割以上がよく関わったと感じているといえる。また, 「保護者とよく関わった」「子どもや保護者が活動しやすいように, 材料を準備するなどの環境を整えた」は, 「とてもあてはまる」と回答した対象者は, それぞれ, 28.8%, 42.5%であり, 子どもとの関わりよりは低いものの, 「少しあてはまる」と合わせると9割弱であり, これらの活動内容もおおむね行われていたといえる。一方, 「ファシリテーター(進行役, 仲介役)として活動できた」は, 「とてもあてはまる」と回答した対象者は12.3%と低く, 「少しあてはまる」と合わせても6割程度と低いことが示された。

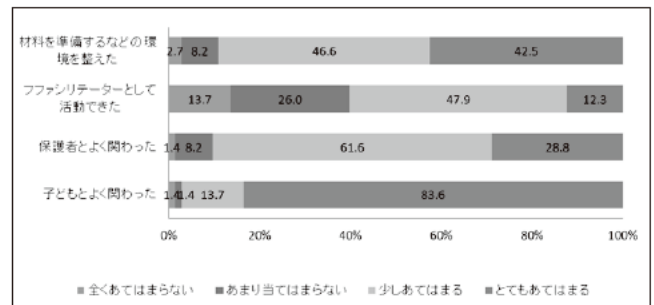


図3 当日の活動内容

②学士力

学士力に関する項目における回答の「1」を1点, 「4」を4点として得点化して, 「1. チームワーク, リーダーシップ」「2. 市民としての社会的責任」「3. コミュニケーション・スキル」「4. 問題解決力」「5. 知識・理解」「6. 統合的な学習経験と創造的思考力」の各得点を合計し, 尺度得点を算出した。各尺度得点の平均値, 標準偏差, α 係数を表4に示す。

③事前と事後の学士力の差異

事前と事後の学士力に差があるかを比較するため, 対応のあるt検定を行った。その結果, コミュニケーション・

表3 学士力に関する項目

チームワーク、リーダーシップ	
1	仲間と一緒に行動することを楽しむことができる
2	仲間に、自分の意見を伝えることができる
3	仲間のよさを生かし、目標の実現に向かって努力できる
4	感情をコントロールでき、仲間と公平に対応できる
5	積極的に考えや意見を言いやすい雰囲気をつくることができる
市民としての社会的責任	
6	地域の行事に参加することができる
7	地域の人と一緒に活動することができる
8	地域で子どもと関わることに、積極的に参加できる
9	社会の一員として自分の力が役立つことで自分に自信が持てる
10	社会の一員として自分が役立つことで責任を果たすことができる
コミュニケーション・スキル	
11	様々な人に対し公平な態度で接し、活動内容について理解させることができる
12	利用方法や使用方法について、具体的に説明ができる
13	話しかけられるのを待つのではなく、自分から話しかけることができる
14	相手の望むことを想像し、行動することができる
15	決められた内容に留まるのではなく、その場で臨機応変に対応ができる
問題解決力	
16	これまでの経験を基に、起こりうる問題を想定することができる
17	指示を持つことなく自ら行動し、問題を発見する姿勢を保つことができる
18	起こった問題に対し、必要な情報を収集し解決することができる
19	解決策を仲間の人たちに知らせ、共用することができる
20	活動全体を広く捉え、その時に必要な指示を的確にだすことができる
知識・理解	
21	イメージしたことを色や形で表すことができる
22	子どもの造形表現を理解できる
23	素材の特性を理解し適切な道具を使って表現できる
24	鑑賞を楽しむことができる
25	広い見識でアート（造形、美術）を楽しむ事ができる
統合的な学習経験と創造的思考力	
26	子どもに造形の指導ができる
27	子どもをとりまく環境を理解し、行動できる。
28	今までに得た知識や技能を統合的に結びつけ表現することができる
29	自分なりの考えを持つ事ができる
30	更に深く学びたいと思う事ができる

スキル、統合的な学習経験と創造的思考力において有意差が認められ、いずれも事前より事後のほうが高いことが示された（それぞれ、 $t(109) = 3.44, p < .001$ ）。

(4) 考察

研究2では、アンケート調査を行い、アートパークへの参加時間、活動内容、学士力を測定し、アートパークの参加により学士力のどのような側面が向上するかについて検討することを目的とした。そこで、以下で得られた結果に基づいて考察を行う。

まず、事前準備の時間は、「3～5時間未満」が最も多く、次いで「10～20時間」「20時間以上」が多くみられた。事前準備の時間の標準偏差が1.48と比較的高いことを踏まえると、事前準備に費やした時間は、個人によってばらつきが大きいものと考えられる。また当日の活動時間は、「5～10時間」「10時間以上」という回答が多かったが、これは、当日1日の活動時間にあたるためと考えられる。

次に、活動内容では、「子どもとよく関わった」は、9割以上がよく関わったと感じていた。

また、「保護者とよく関わった」「子どもや保護者が活動しやすいように、材料を準備するなどの環境を整えた」も

9割弱がよく行ったと感じており、これらの活動もおおむね行われていたといえる。これらは、準備の段階から子どもや保護者と関わる活動を想定し、十分な準備をしていたため、当日も活発に活動することができたためと考えられる。

一方、「ファシリテーター（進行役、仲介役）として活動できた」は、6割程度と低かった。これは、「ファシリテーター」という語意が十分に理解されていなかった可能性や理解できていたとしても、そこまで意識が達していない学生が多くいたためではないかと考えられる。

次に、学士力を事前・事後別にみると、事前・事後ともに、チームワーク、リーダーシップの得点が最も高いことが示された。これは、もともと、教育、保育の分野は、チームワークやリーダーシップの能力が高く要求される分野であり、この能力が高い学生が、始めから入学してきている可能性や、今までの授業等でも、このような能力が高くなるような教育を受けているためではないかと考えられる。

表4 学士力の平均値・標準偏差・ α

	事前			事後		
	平均値	標準偏差	α	平均値	標準偏差	α
チームワーク、リーダーシップ	17.09	2.32	.77	17.64	2.67	.82
市民としての社会的責任	16.02	3.14	.89	16.89	2.21	.88
コミュニケーション・スキル	15.35	2.95	.85	16.68	2.67	.82
問題解決力	15.65	2.72	.86	15.79	2.60	.86
知識・理解	16.63	2.78	.89	16.67	2.39	.83
統合的な学習経験と創造的思考力	15.53	2.96	.87	16.56	2.44	.86

注 全ての平均値は5から20の範囲である。 $n=66$

次に、事前と事後の学士力を比較した結果、コミュニケーション・スキル、統合的な学習経験と創造的思考力の各得点において、事前より事後のほうが高かったことから、これらの学士力は、アートパークの活動により向上する可能性が高いといえる。コミュニケーション・スキルが向上した理由として、アートパークでの活動の中で、子ども、保護者、地域の様々な外部の人々と接する機会が得られ、臨機応変な対応が必要とされるためではないかと考えられる。また、アートパークでは、子どもに造形を通して関わる際に、今まで学んだ知識や技能を統合的に活用していく必要があり、こうした経験を通して、統合的な学習経験と創造的思考力が向上するものと考えられる。これらは、授業内では学ぶ機会が少なく、学外活動を通じて、社会との関わりの中で体験的に学習されていく側面と考えられ、このような学習において、学外活動の意義があるのではないかと考えられる。

5. まとめと今後の課題

最後に、研究1及び研究2を通して、芸術を主体とした

学外活動の今後の課題を述べる。

研究1では、芸術を主体とした「学外活動で育つ力」を教員の経験から設問を導き出し調査した。学生自身が身についたと考える力として「造形力」「発想力」「問題解決能力」が挙げられた。しかし、設問の方法や内容に課題がみられ、調査項目や内容を見直し、より実証的に検討を行う必要があると考えられた。そこで研究2では、川村学園女子大学桂瑠以准教授に協力を依頼して、芸術を主体とした学外活動を通して伸びる力の根拠を学士力の観点から検討した。

研究2に於ける課題として、第1に、活動時間及び活動内容と学士力との関連の検討が挙げられる。本研究では、アートパークの事前と事後で、学士力の一部に差が認められた。ただし、アートパークでの活動時間や活動内容の違いによって、学士力にどのような影響が及ぼされるかについては検討されていないため、今後はこれらの影響を明らかにしていくことが課題と考えられる。

第2に、本研究では、学士力の中でも芸術活動に関連するものに焦点をあてて検討を行ったが、測定したのは学士力に挙げられた内容の極一部であり、例えば汎用的技能の

中でも「数量的スキル」「情報リテラシー」などについては検討されていない。そのため、今後は本研究で検討されなかった側面も含めて検討を行い、芸術を主体とした学外活動が、学士力全体にどのような効果をもたらすのかを明らかにすることが必要と考えられる。またその際、量的研究にあわせて、インタビュー調査などの質的研究を行うことにより、どのような学びが行われたかを多角的に検討していくことも課題といえる。

参考文献、資料

- 1) 「集まれ！アートパーク 公園改造計画」にみる、教員養成大学における「アートプロジェクト」の可能性 単 2008年12月 FD紀要 聖徳の教え育む技法 NO.3
- 2) 「教員養成大学における 親子対象アートプロジェクトの可能性～『集まれ！アートパーク 公園改造計画』の実践から～」単 平成22年3月 連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成17～21年度研究集録
- 3) 「アート・プロジェクトを通じた大学と地域の連携 松戸中央公園におけるアートパークプロジェクトの実践と分析」 奥村高明, 大成哲雄 大学美術教育学会 宮城大会 宮城教育大学 2011年9月24日
- 4) OECD 東北スクール：OECD 東北スクールは、福島、宮城、岩手の被災地から中学生・高校生約100人を集め、2年半にわたる集中スクールと地域スクールを経て、「2014年8月、パリで東北の魅力を世界にアピールするイベントをつくる」という、プロジェクト学習をその内容としている。
- 5) 中央教育審議会答申：学士課程教育の構築に向けて（答申）（2008）文部科学省



1



2



3



4



5



6

写真1 アートパーク10, 事前準備の様子

写真2～6 アートパーク10, 2017年7月2日 松戸中央公園